

Title	人と組織を活性化して未来を創りだす P F U未来塾
Author(s)	
Citation	JAIST社会イノベーション・シリーズ, 10
Issue Date	2008-03
Type	Others
Text version	publ isher
URL	http://hdl.handle.net/10119/4862
Rights	
Description	

INNOVATION by PFU MIRAIYUKU

株式会社PFU(社長:輪島藤夫、本社:石川県かほく市)は、世界シェアNo.1の「ドキュメントスキャナ」、ITベンダーとして蓄積した技術を結集させた「ProDeS(開発製造サービス)」、そしてITインフラ環境開発による「ソリューション」を三本柱として事業を展開しています。特にイメージスキャナビジネスについては約20年の実績を持ち、そのラインアップに毎年新機種を投入するなど、常に新しい技術を開拓し続けています。

確かな技術力と最先端の開発環境を持つPFUが、2010年の創業50周年に向けて力を入れているのが人と組織の活性化です。同社はJAISTが開講する「いしかわMOTスクール」に毎年社員を派遣し、MOT改革の研究と実践に取り組んでいます。さらにMOTスクール修了生が社内で改革のすそ野を広げようと「PFU未来塾」と銘打った活動を展開しています。未来塾を含めた全社の改革活動を支援するActive-V推進室室長の山口さんと、いしかわMOTスクールに学び、未来塾の講師を務める石黒さんにお話をうかがいました。

Interview

ニュービジネス推進統括部
Active-V推進室 室長

山口 正毅 さん



ソフト・アプライアンスグループ
アプライアンスソフトウェア事業部
担当部長

石黒 渉 さん



ー PFU 未来塾が誕生した背景を教えてください。

当社ではいしかわMOTスクールが開講された年から毎年社員を3名ずつ派遣しており、それぞれがMOTスクールで学んだことを現場に持ち帰って改善・改革を実践しています。その延長線上で、MOTスクール修了生が連携して何か会社へ貢献できないかという意見が出てきました。修了生同士で議論を重ねる中で、当社の“ありたい姿”は、社員全員が改革人材になることだということが見えてきて、ではそのための人づくり風土づくりをしようではないかと、2006年度に10名の受講者を迎えて未来塾が発足しました。

具体的には月に一度、金曜日の午後に講義やグループワークを行っています。受講者は全6回の活動を通してMOTやJAIST知識科学研究科の近藤教授が提唱する「四画面思考法」について理解を深め、「自分ごと・四画面・改革の輪」の改革三原則に基づき、自分自身の四画面を作成していきます。完成した四画面はファイナルプレゼンテーションで発表しますが、そこからが本当の

スタートで、これを現場で実践に移していくことになります。グループワークにはJAISTの연구원の方に入門てもらっていますし、近藤教授には第1回目にセミナーを行ってもらうほか、ファイナルプレゼンテーションにも参加していただいております。今度ともこうした産学の連携を継続していきたいと考えています。



PFU 未来塾におけるグループワーク

ー どのような方が受講されているのですか？

開発系の部署のマネージャクラスの社員です。いしかわMOTスクールの特徴は「技術力と人間力の二刀流」で改革を進めていくという点にあります。当社は「技術と信頼のPFU」をスローガンとして掲げており、ものづくりの技術については確かな自信があります。一方で人間力についてどうかと言いますと、塾の発足に先立って行った

調査では、日々の仕事に追われている社員が多く、疲弊感ややらされ感が漂っているという現状がありました。こうした状況を改善したいということで、トップダウンではなく、ある程度ボトムアップでやろうということで、ミドル層の社員を対象にして、人間力を高めるための後押しをしています。

ー 受講生にはどのようなことを期待していますか？

従業員のやる気が高くなければ、良い製品は生まれないし、成長も長続きしないというのが、当社の社長の信念です。そのため、社員ひとりひとりが生き活きと主体的に行動できる組織風土づくりを目標に、さまざまな取り組みを全社的に展開しています。その中枢を担う「Active-V推進室」では、未来塾を含めて5つの枠組みを策定し、全社の改革活動を支援しています。

「Rising-V」は、社員の試作品の作製を支援する制

度で、夢やアイデアを実現する場であると言えます。「知空間」はナレッジマネジメントの取り組みで、部署を超えた知識融合の場です。「見える化」はコミュニケーション促進のための活動で、開発プロセスに携わるメンバー全員が参加して行われます。「アイデア・スナップ」は業務改善への取り組みで、個人の事例を広報することで、横展開を可能にしたり、さらに新たなアイデアを加えていく仕組みです。

これらに並ぶかたちで「PFU未来塾」が位置づけられています。未来塾で“気づき”を得た社員が、社内に整備されているフレームワークを活用してさらに人間力を高め、改革を進めていく、というのが我々の狙いとするところです。

未来塾自体の活動は半年で終わりますが、改革実践は未来に向けて継続していかなければなりません。そのため我々は未来塾の修了生のフォローアップにも力を入れています。いしかわMOTスクールの修了生がシンジケート活動を行っていますが、未来塾も独自に修了生によるシンジケート活動を行っていて、各自が現場の課題を持ち寄り、共有し、議論し、アドバイスし合う場を持っています。

■ Active-V 活動

「Rising-V」夢やアイデア実現の場

「知空間」組織を超えて知を結集する場

「見える化」コミュニケーション活性化の場

「アイデア・スナップ」改善を実践する場

「PFU未来塾」人間力を学び成長する場

ー MOT改革をキーワードに異業種交流もされているそうですね。

未来塾では通常の活動のほか、「芳珠記念病院 和楽仁塾」や「のと・七尾人間塾」など、いしかわMOTスクールやMOTシンジケートの仲間との交流会も行っています。それ以外でも、未来塾の活動をぜひ見せてほしいという団体の視察を迎えたこともあります。実際、社員が社外の人のお話を聞く機会は非常に少ないので、こうした交流はとても良い刺激になっていますし、たくさんの気づきをもたらしてくれています。



改革を実践するPFU未来塾参加者と近藤教授